
天国の月

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国の月

【Nコード】

N5406F

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

意地っ張りな私と意地っ張りな君は本当によく似ていた…

自分の面影 1

「あんたはバカだよっ！！大馬鹿者だよっ！！！」
まさか私がこんな言葉を吐く時が来るなんて。

保健室に呼ばれたとき私は何か嫌な予感がして。
本当に嫌な予感がして。

誰もが私のこと疎むのに。

泉野は変わらず私に付いてきた。

何が楽しいんだか判らないけど何故だか付いてきた。

だって私が暴れてたのは泉野が中学に上がる前のことで。
私は受験生で。

昔なら考えもしない将来の事考えるようになってきていて。
だから。

そして現在の私のことを担任はこう言う。

「美石は落ち着いたなあ。」って。

うん。私もそう思うよ。

きつと前の私ならまだきつとバカな事やってたと思う。

泉野は屋上で倒れてたんだって。

意識はなくて。

頭でも打ってたらいけないからって取り敢えず保健の先生がベッド
に運んだって。

そして私が呼ばれて。

泉野の家に電話が通じないから連絡をしてってくれて。

だから私は面識のある泉野の母親に連絡を取ったんだ。

泉野の母親は昔歌うたいだったんだって。

だから人よりずっと可愛い。

だけど泉野のこと考えないで「自己中」だから。

泉野の深い心の闇に気づかなかったツケが今こうして実際に起こってしまった。

泉野は口癖のように私は何で生まれてきたんだろうってよく言った。

私はそんな泉野に言っていない事がある。

私だって本当に2年ほど前までは平気で人にそんな言葉吐いていた。

それがどれだけ人の心を深く傷つけるかだなんて思いもしなかった。

泉野の母親は保健室に飛んできて。

「真理は何てバカな子なの？」

そう責めた。

「みかさちゃんが真理を見つけてくれたの？」

私は首を振り答える。

「佐伯って泉野と同学年の子が見つけてくれたみたいで。

私はあなたに連絡を取っただけです。」

「どうしてかしらね？」

泉野の母親は呟く。

「私だって真理のこと思ってるのに上手く伝わらなくて。真理には悪いことをしたわ。」

こんな騒動を起こして。

そう呟いて泉野の母親は泉野の担任が呼びに来たので出て行った。

私は溜息をついて。

「なあ？泉野。

聞こえてるか？」

死んだように眠る泉野に語りかけたんだ。

「何だって兄弟でもないのに私と泉野は似てるんだろう？」
本当に。

昔の自分を髣髴とさせる眼差しと。

切れそうなくらい尖った感情。

危うい視線。

ねえ？どうして？

まさに誰かみたいだと一人ごちる。

「なあ。泉野。

帰っておいで。私みたいになっちゃダメだ。」

私はありったけの思いで呟いた。

自分の面影 2

「みかさ……。今日は何処へ飛ばす？」

ヘルメットを被りながら親友のみさとがそう呟くから。

本当は学校は多分永遠に停学の私と一緒にいたらみさとまで堕ちちやうって思ったけど。

そんな感情はとうに消えて。

引き摺り落としちゃった。

本当は誰でもこんな軽い気持ちで。

自分の居場所がないからだとか。

弱いからだとか。

初めは私なんかと一緒にいていいの？って思ったけど。

だけどそれも最初のうちだけで。

罪悪感すら感じたのも遠い昔の記憶で。

「今日は真紅海岸いこ？」

私はハンドルを持ち。

アクセルを踏みしめた。

「きつと風が気持ちよくてきつと今の時期はまだ誰もいなくて足跡つけ放題だ。」

みさとが薄く微笑んだ事今でも鮮明に覚えてる。

真紅海岸とは昔人魚が身を投げた海岸だと言われている。
その時流した涙が紅く染まって。

海がたまに紅く見えるんだって。

「…泉野。聞こえてるか？」

私は死んだように眠る泉野へ語りかける。

「私はあんたに私のようになって欲しくないって思ったよ。」
自嘲気味に呟いて。

「…あいつも今の私のような心境だったのかもな。」
一人こちる。

「ねえ。みかさ。見て。
すっごい綺麗…。」

後部座席からみさとの呟く声が聞こえる。

私は前だけ向いて。

「少し飛ばすよ。」

そう言ったときだった。

きっと私が正規の免許を取ってたら。
避けられた事故だったかもしれない。

見事に何にもないところでバイクの車体ごとひっくり返って。

そこで暗転した。

私の記憶はそこまでで。

何ともいえない嫌な気持ちだった。

私を呼ぶ声 1

私は昔から良い子じゃなかったし。

良い子で居ようとすればするほど空回りをして苦しかった。

中学に入ってからずっと乗りたかったバイクを掠めてきて。

乗り回した。

乗り回してる時だけ私は自由になれた気がした。

誰にも声なんかかけた覚えはないけど。

何故かみさとのように私の周りには人が集まった。

そして私でも知らない間に「団」という不良の集まりみたいなものが結成されて。

何故か私はリーダーになっていた。

私は知らない間に不良のリーダーにされてて。
後ろ指差されるのはいつも私だった。

私は居場所が欲しかったけど別にみんなで騒ぎたかった訳じゃなくて。

ただバイクを乗り回したかった。

事実。私がいなくてに他の取り巻きの女どもが言ってる言葉といえは。

「美石にやらせたらいいよ〜」。

あいつ何を隠そう一番初めに団作って原チャに乗り始めたじゃん？
怒られる事にも慣れてそうだし丁度いいじゃん？」

私は単純にそれを聞いたとき悲しかった。
だけど。

だけどやっぱり人を頼りにしちゃいけないって思った。

だから私は一人でバイクを乗り回す。
幼馴染以外を除いては。

そして。

何にもないところで私はテクがないからひっくり返った。

その日は良く晴れた日で。

覚えてるのはみさとの悲鳴と。

痛んだ自分の背中だった。

ああ。もうどうでもいいや。

本当にその時は思ったんだ。

死んでるように生きてるぐらいなら死んだ方がマシだって。

こんなつまらない世界に何で私は生まれてきたんだろうって。

走馬灯のように思った。

生きる価値なんて無いかもってずっと思ってた。

何かハッキリしちゃった感じがして。

でも私を遠くから呼ぶ声がしたんだ。

私を呼ぶ声 2

私を呼ぶ声は大きかった。
まるで叫び声みたいに。

みんなが振り向きそうな声で。

私は真っ白い空間に浮いてて。
なんかどうでもいいやって諦めてた。

だって死んでるように生きてて。
自殺願望は大きくあったけど死ぬ勇氣はこれっぽっちもなくって。
だから中途半端で。
判ってるけど素直になれなくて。

だから別に驚きもしなかった。
死ぬってこういうことを言うんだってうつすら思ったただけだった。

そこへ肩を叩く奴がいる。
振り向いたら綺麗に笑うみさだった。

「みかさ。良かったね？」
ナニガ？

イヤホントにマジ思ったって。

初めは意味が判らず呆然としてたら。
みさとは私呼ばれたんだ。
そう言った。

「ってか私のバイク知らない？」
私はみさとの思いはそっちのけで。
そう訊いたら。

「みかさ。判ってるよね？」
そうみさとは続けた。
ナニヲ？

問う間もなくみさとは白い部屋に入っていった。

一体何があつたの？
みさとは何処へ行つたの？
私はどうしたらいいの？

「美石みかささん。」
そして私は叫び声の主に出会った。
「ちゃんと起きてて？
目を覚ましてて？
じゃないと私救えない。」

目は覚めてるよ？
ちよつと驚いただけで。
ちゃんと起きてるよ？
意識が飛んでるだけで。

そんなに叫ばなくなつて私は…。

…起きてなかった。
気づけば目を塞ぎそうなぐらい眠くて。
安眠ってこういうこと言うんだなって何だか幸せな気分です。

痛い現実 1

「痛いなあ。もう何すんだよっ！！！！！」

普通なら震え上がるような声を私はあげて。
私を叩いた奴を睨み上げた。

「起きとけって言ったら起きてたらいいんだよっ！！！！！！！」

そいつは私に負けない大きい声で私に怒鳴った。
怒鳴られ慣れない私は結構びびって。

それは私が本当は臆病な証で。
こんな命何処で終わったって良いって思ってるのに死ぬ勇氣すらな
いっていう。

その証拠だった。

その声の主は私の前に現れて。
白い羽根を持っていた。
綺麗な白い羽根。

でも片翼だった。

白い白い部屋で。
水晶みたいな珠があつて。
噴水みたいに水があつて。

ってか此処は何処なの？って感じ。

「ねえ。何であんたは素直に人の言うこと聞けない訳？」

痛い一言は私の心を貫く。

「だって。」

だって誰も私のことなんかどうでも良いし。

「一人で生きてるとでも思ってるわけ？」

傲慢にもほどがあるって思っけど？」

だけど。

だけど私は。

「死ぬ勇気もないくせに死んでもいいだなんてね。

そんな奴は死ねばいいんだよ！！！」

私は何も言えなかった。

だって誰も突きつけなかった言葉を私に突きつけ。

どれだけ傷つける言葉を私は吐いてきたか思わなかったから。

「全く私はこんな奴のために羽根折らなきゃならなかっただなんて思わなかった。

もっとマシだと思ってたのに。

助け損だわ。」

助けてだなんて頼んだ覚えはないって咽喉まで出掛かって。

その声の主は私を睨み上げ。

「助けてなんて頼んでないだなんて言ってる場合じゃないから。」

一言そう言った。

だって本当に私はいつ死んでも良くて。
バイクを乗り回して。
大好きだった。

人を誘った覚えはない。
みさと以外は。

「そっぴやみさととは？」

ふつと気づいた。

みさととは私の前を通り過ぎて白い部屋に入って行ったまんま。
何処に行ったの？

声の主は私を見て。

「見ろよ。あんたが起こした結果だ。」

そう言っぴ白い水晶球を見せた。

痛い現実 2

目の前に広がった光景は。
にわかに信じられなかった。

だってみさとの家族が泣いてて。
みさとは白い布を顔に被せられてて。

「だって嘘でしょ？」

さっきまで一緒にバイクに乗ってて。
白い手は温かくて。

「あんたが起こした現実を取り返しがつかないぐらいの大きな事だったんだ。」

私が救いを求めるように声の主を見ると声の主は私を睨む。

私は竦みあがった。

だって予期せぬ出来事だったから。

心の何処かで自分はきつとこんな目に遭わないって。

何処かで楽観的にそう思ってたから。

みさとはずっと私の隣で笑って。

笑っていてくれるって信じてたから。

そんな保証何処にもないのに。

「どうして。」

小さく叫んだ。

「どうしてってあんたが言うの？」

ドウシテツテアンタガイウノ？

「人の台詞取らないであげてくれる？」

声の主は私を絶対許さない面持ちで。

「だって…。」

「だってじゃない。あんたの所為だ。」

だってみさとは。

本当に笑ってて。

私は自分の起こした結果の責任に押し潰れそうだった。

私はどう償えば良い？

その言葉さえ咽喉に何かが詰まったように出てこない。

水晶の中でみさとの両親が片親の私の母親に頭を下げた。

どうして？

だって私が悪くて。

「止めてください！！うちのバカ娘がみさとちゃんをこんなに…」

「！！！！」

「うちの娘がみかさちゃんに救われたって言ってたから。」

どうして…。

私には目の前で起きてる出来事が信じられなかった。

私は。

私は。

「美石さんに救われたって。」

だってあの子言っただけです。

普段何も言わないあの子がみかさちゃんの事を言う時だけは瞳を輝かせてたから。」

「ばかだよっ！……！」

みかさは！……！！……！！」

私の親は容赦がなかった。

本当はずっと私のこと見て話して欲しかった。

本当はずっと愛して欲しかった。

本当はずっとうちは片親だからって厳しくしないで欲しかった。

「……判った？」

声の主が水晶を抱いて。

映し出していた映像を消した。

「あなただけがさびしいわけじゃないってこと。
気づいた？」

必死の言葉 1

声の主は私を睨み。
私の心を貫いた。

「あんたは人殺しだ。」

…罪は消えない。

罪は重いと告げる。

私は。

私は泣いていた。

声を上げること忘れはらと涙が溢れた。
自分の罪の重さに押し潰れそうだった。

「だけど。」

声の主は続ける。

「だけどこれになかったら私はあんたを救えなかった。」

そして。

意を決したように私のそばに声の主は立ち。
私の手を握って言った。

「私はあんたの姉の千草です。」

「えっ？」

うちは片親で。

気づいたときはもう既に仕事で忙しい母親の後姿しか覚えてなくて。
その母親の後姿は年々細くなっていった。

「千草やお父さんのようにみかさまで私を置いていくの？」
水晶球から聞こえた声は。
確かに母の物だった。

母に父親の事を聞くと事故で亡くなったのよと言った。
そして姉の事は触れもしなかったから全然知らなかった。

「私はね。生まれて名前を付けてもらってからすぐに死んじゃったから。」

「えっ？」

「でも未来を持ってたであろう人間には神様がここで羽根をくれたんだ。」

夭折した分此処で夢が詰まった羽根を持たせてくれて。
地上のあなたたちを助ける事が一回だけできるんだ。」

片翼は使ってしまったと千草は言う。
あんたを此処へ呼び寄せるため。

そしてもう片方は。

「今から地上にあんたの魂送るから精一杯生きるんだよ。
みさとを殺したのはあんだけど地上では事故で済むから。
もう2度とこんな間違い犯さないで。」

2回目はないから…。」

そこで私の記憶は途絶えて。

地上ではICUの中で私は懸命に治療を受けていた。

心臓マッサージを受けて。

脳波の異常を調べて。

血はどくどくと止まらないかのように出て。

だ^がけど。

みんな私を救おうと必死に頑張ってくれたから。
奇跡は起きたんだ。

必死の言葉 2

奇跡って滅多に起こらないから奇跡って言うんだ。

ICUで私は頑張っていた。

みんなの必死の助けで私は生還する事が出来た。

生きて幸せになつて。

もう2度とこんな思い人にさせないで。

置いて行かれる方の身にもなつて。

置いて行く方だって辛いけど。

私はベッドで気づいたときは。

包帯ぐるぐる巻きで。

だけとだけど。

頭も打ってなくて。

ちゃんと話が出来て。

記憶障害もなくて。

ただ気づいたときに。

思いつきり私は頬を叩かれた。

「みかさまで逝っちゃったらお母さん本当に一人になっちゃうじゃない!!!」

ああ。私はあなたに振り向いて欲しかったんだ。

私はここにいてよって全身で叫んでたんだ。

…愛して欲しかったんだ。

「お母さん。ごめん。
ごめんなさい。」

みさとの両親にだって謝っても謝りきれないぐらいだった。
だから私は誓ったんだ。

私のようになってしまう奴が居たら。
全身全霊をかけて。
止めてやるって。

だから泉野。帰っておいで。
お前の居場所は此処にあるから。

お前はこんなとこでくたばる奴じゃない。
もっと大きいことやらかして笑ってるのが丁度良い。

「…先輩？」
ほら起きた。
「馬鹿やろっ！！！」

私は情けない事に泣いていた。
こんなにも置いて行かれるかも知れない方が辛いことだなんて知ら
なかったから。

「泉野。」
私はお前の名を呼ぶから。
いつでもお前の味方だから。

だから帰っておいで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406f/>

天国の月

2010年10月15日08時51分発行